入れて（描き出した）のは（さういふ田舎町を取り囲んでゐる自然の美しさであつた。特にこの谷の水の清いことと稲の美しいことであつた。田植から秋の収穫に至るまでの稲田の姿態は実に次々と描かれてみたし、四方の山から湧き出てくる水が縦横に小さい流れなつて流れて行く有様の描写などは（読んでゐるとその水音が聞えるやうな印象を与へる。これらの描写がわたくしには非常に新鮮な何ともいへないいい感じを与へるのであ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

つた。これは「異性の記」よりも前に出た「自
己と人生」を読んでゐた人たちには、別に珍
らしい描写でもなかつたかも知れないが、し
かしわたくしは当時さういふ文集のあつ
ことは全く知らなかつたし、知つてから後で
もそれを手にして読んだのは一高に入学し
てから後であつたと思よ。従つてわたくしよ
りも五つ六つ年上の人たちが「自己と人生」
から受けたやうな感銘を、わたくしは「思出
の記」を読み始めよと共に受けたのであつた。

中央公論　十月号　四印

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

今見るとさほどすっきりとした描写とは思へないが、あの頃は飾りの多い文章が普通に行はれてゐたのでそれとの對照の上からこの簪花の文章が実にさっぱりとした爽やかな印象を與へたのであらう。

第二のキリスト教への接近の描写は、文章の上からでなく内容の方から善い影響を與へてゐるにかゝはらず、あまりに感へた主人公の數奇な運命が立ち入れて描いてあ

かつたが、主人公にキリスト教を近づけた兼
安といふ果物屋の営業の淫
しい人物といふ印象を與へたばかりでなく、
比叡山上での不慮の死によつて、主人公を同
心に導くと共に、讀者をも同じやうな心持に
させた點よ。それは一つはその頃の社會の一
部にあつた雰囲氣とも關係があるかも知れな
い。わたくしの兄が三高へ入つて教會へ近づ
き始めたのがちやうどその頃であつたし、魚
住影雄君が東京で洗禮を受けたのはちやうど

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

その前年であった。わがてその次の年には藤村操の自殺という雰囲気の中では、立身出世のことなどより も倫理の問題や人生の意義の問題の方が遥かに重大であるという意識はもうはっきりと現われてきたやうに思よ。

第三の悲愛の様相は、深刻なところなどの少しもない、極めてうるわしくしいたものである。

がく多分その点が当時のわたくしの年頃にちやうど合ったのであったかも知れないく。わた

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

佐木 横五

くしはそれに強い魅力を感じ、さういふ恋愛
にあこがれるやうな気持を激しくそそられた
やうに思ふ。多分それがわたくしを新
興小説への興味から引き離したのであらう。
その意味でわたくしは、この思出の記を書いた
時から大人の世界に眼を向けるやうになった
といへるのであらう。

さういふ風にわたくしの眼を開いたのが蘆
花の小説であったからと言って、その時から
わたくしが小説好きになったといふわけでは

中央公論 十月号 四印

(和辻用箋)

中央公論 十月号 四印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論 十月号 四印

ない。同じ藤花の小説でも「不如帰」はあまり好きでなかった。この小説をやはり下間君が借してくれたのであったかどうかははっきりとは覚えてゐないが、「思出の記」を読んでから間もなく「不如帰」を読んだことはほんやりと覚えてゐる。女主人公を可哀相だ思ったことは事実であるかしかし作品としてはあまり好きになれなかった。またその頃の小説として尾崎紅葉の「金色夜叉」が非常に評判になってゐたそれもあまり読みたくと

中央公論 十月号 四印

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十月号　四印

は果はなかった。同級の黒枝達三君の兄さんの演次氏はその頃たしか三高に在学中であったが、その兄さんから黒枝君のところへ漫画新聞を送ってくる。それに「金色夜叉」が連載されてゐたので、黒枝君がよくその小説の噂をして聞かせた。黒枝君の家へ遊びに行った時に、それを一寸のぞいて見たこともあったやうに思ふ。しかしそれを借りて読むほどの熱心もなかった。後ってわたくしが「金色夜叉」を最初に読んだのは、一二年の後、紅

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

葉山全集が出てからではなかつたかと思ふ。当時あの小説の中の鹽原の紅葉の文は名文として有名であつたが、わたくしはあまり感銘を受けなかつた。そのほかにあの当時小説として何を讀んだかと言はれると、何もあげられるのはないやうに思ふ。

わたくしが興味を持つたのは、小説よりもむしろ新体詩であつた。その頃わたくしはといふ雑誌を購讀していふ縁でか句文庫といふ叢書を買つてゐた。それに載つてゐる沼井醉茗、横瀬夜雨、

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

伊良子清白などの作品を愛読した。丸もこの文庫には詩のほかに留主文のやうなものが載つてゐてくそれが妙文一致体で、非常に清新な印象を與へた。また小島烏水などの連中の日本アルプス登山記はその頃にそう連載されてゐたやうな気がする。だから文庫の記憶は詩のことだけに集中してゐるわけではないが、しかし文庫を購読してゐた際でわたくしは間となく明星を購読するやうになつたのである。或る月極め読者が

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

急にやめることになつたのであとを引受けないかと西村書房の主人からすゝめられたのである。さういふ機会でもなければ応頭で「明星」を見かけるなどといふことは、姫路の町では到頭あり得ないことであつた。でわたくしは「明星」が創刊されてから三年目位で「明星」の愛読者になつたのである。短歌より新体詩の方に魅力を感じた。特に薄田泣菫も新体詩の方に魅力を感じた。特に薄田泣菫や蒲原有明などの詩が好きであつた。

思想の方面で「思出の記」が当つたほどの感

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

鉱を出へたすのはほかにはなかった。ちかう
どこの頃は高山樗牛が青年の間にそてはやさ
れてゐて、わたくしたちより少し年上の人た
ちは、その文章を暗誦したりなどしてゐたや
うに思ふ。さういふ先輩を持つてゐる彼友が、
わが神の記」などを暗誦して傍かせてくれた
ことすあった。こかしわたくしの兄はさう、
ふことをしなかったし、ほかにさういふ雰囲
気にふれる機会もなかったので、わたくしは
樗牛の文章を愛唱したことはない。当時「太陽」

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十月号　四印

などに載つてゐた樗牛の文章を少しは読んだ
やうに思ふが、印象は何も残つてゐない。そ
の頃に読んだことをはつきりと覚えてゐるの
は、中江兆民の「一年有半」である。この書
者が死期を定められてからかういふ文章を平
気として書いてゐる無邪気さには非常に打たれ
たのであつたが、しかし内容的に強い感銘を受
けたやうな気はなかつたやうに思ふ。あとまで残つ
てゐた印象は、この著者が元老などの政治家
を出つぴどく罵倒してゐたといふことである。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

今探して見ると、山縣は小賄く、松方は至愚く、
西郷は怯懦く、錦の元老は筆を汗すに足ず者
莫しく、伊藤以下皆死し去ること一日早ければ、く
一日国家の益と成ること可しく、といふ見な自が見つ
かるく、さういふ類の批判をわたくしはそのまま
う受け芸れてゐたやうに思よく、しかしその同
じ著者が井上毅に関してゐるといふことの意味を、
賞讃の言葉を遺してゐるといふことの意味を、
その当時は全く気づきもしなかったのである
たく

（つづく）

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

正字旧かな、おどり原文のまま

自叙伝の試み（三十二）

和辻哲郎

中學生（三）

明治三十六年の三月であったが、ちょうどその時に大阪で博覧會が開かれた。これは第五回内国勧業博覧會で、明治十年に始まった全国自治体の会の最後のものかと思う。その後四年を経て明治四十年に東京府主催の物産陳列會が上野で開かれた。その時の日本の社会がまだ幼稚であったからそれはわたくしには満十四才になったのであるが、かなり強い印象を与えた。

中央公論　十一月号　八印

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

明治四十年に東京府主催の博覧会が上野で開かれたが、この両度の博覧会はわたくしにはかなり強い印象を残してゐる。それはわたくしがまだ幼少であつたからといふだけではなく、当時の日本の社会がさういふ催しによつて強い刺戟を受けてゐたのではないかと思ふ。蘆花の「思出の記」の末尾に、主人公の手紙の形式で結びの文章が載つてゐるが、そこに「僕の舅姑は、来年は大阪の博覧会見物かたがた、是非とも京にて孫の顔を見よと申伝候」

（和辻用箋）

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

という一節がある。その當妓のまるのは熊本でもあらうかと思はれる丸刈の町なのであるから、見物人が全国郎に集まってくるといふことは当然豫想されてゐたことになる。だも菖蒲花がこの文句を書いたのは明治三十四年の春頃であらうから、懇親会は初め三十五年に開催（きまる）の豫定であったのかも知れない。それがどうして延期されたのかくわたくしは何も覚えないがくとにかく実際の開催の二年前に衣のやうに誤謬とされてゐたことは事実なの

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

で、す。明治四十年の東京の博覧会にして、
当時朝日新聞に初めて小説を書きいだした漱石の
「虞美人草」のなかに、かなり大きく取り扱
はれてゐる。博覧会といふそのがまだそれほ
どに刺戟的だつたのである。
でわたくしは三月初めの休暇の間に
この博覧会を見に行つた。当時従兄の井上の
家がまだ西宮にあつたので、そこに泊めて貰
つて、従兄と一緒に見に行つたのである。二
日位は続けて行つたやうに思ふ。

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

今その時の記憶を辿つて見ると、悌次会及びそれに関係のある現象が少し思ひ出される（感じ）だけで、大阪といふ大都会の印象は何も残つてゐない。この時よりも前にわたくしは（行か）大阪へ連れて来られたことがあるが、その時のことも余まりはつきりとは覚えてゐない。それは多分井上の家が西宮へ引越した年の冬のことででもあつたらうか。初めてかういふ町の夏夜の物音を（聞いて）非常に物珍らしく覚えた事がある。犬の用心の拍子木の音と

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

が、夜なきうどんの呼び聲などである。外も人は日本の町の第一印象としてよく下駄の音をあげてゐるやうであるが、さういふ描写を讀んだ時にわたくし（自身）もかうコロといふ下駄の音を物珍らしく聞いたことがあったやうな氣がした。下駄の音は村でだって聞かれないことはない筈であるが、夜の凍った道の上を慌かしさうに下駄の音を立てゝ通って行くといふ風なことは、村の夜には滅多にないゝ、町の夜には通例の出来事であった、とは言へまい

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

も知れない。さういふに西宮に初めて泊つた夜の印象は殘つてゐるが、畫間大阪の町へ連れて行かれた時のことは、人力車に乘つて中の島へ行つたといふことと、堀添ひの通りの鳥屋で晝飯を食べたといふことのほかに、何も心に殘つてゐない。その頃中の島には、村のお寺を驚かせるほどの建物は何一つ建つてゐなかつた。それよりもわたくしには鳥鍋の中の出來かゝりの鷄卵の方が珍らしかつた。

さういふわけで、博覽會見物の時には、大

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

阪という大都会に死んど初めて描すわけで
あつたが、しかし都会としての大阪には死人
と関心を抱かず、たゞ悠悠会はかりを目さし
てゐたやうに思よ。当時の大阪は勿論まだ
電車はなく、市中の交通機関は人力車だけだ
つたのであるから、わたくしたちの利用し得
たのは、市の外部を走つてゐる汽車だけであ
つた。梅田駅で城東線に乗りかへて、道時ま
だ畑の続いてゐた東の郊外を南の方へ、天王
寺駅まで行つて、そこから悠悠会場まで何町

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

か畑の中を歩いた。つまり大阪の町中は全く、
通りなかったわけである。
がそれでもこの地脱会というのが大阪市
の周囲に一種の集合を湧き立たせてみた。当
時汽車の姿車はまだボギー車の出来ない頃
で、五十人集りの横側に扉のついた小さい車
であったが、それが主として地脱会見物の人
を運ぶのであるから、西宮で集る時にもう満
員で、車内に立ってる人が多かった。大も
満員とさってゐ、その頃の満員は、関東大震

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

災のあととか、太平洋戦争の災後とかの
満災を経験した人たちにとっては、物の数に
もならない程えのものであったが、しかしその
当時としては珍らしい現象であった。特に
田舎者にとっては、さういふ群集そのものが
非常に刺激的に見えた。その群集が梅田駅で
地下鉄の回いやうに小さい客車になだれ込み
で行くのであるから、この郊外廻りの、平生
は閑散な支線が、大変な混雑であった。かう
して一つの列車が天王寺駅へつくと、その吐

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

き出した集会がそろ〳〵と列をなして、沖の
中の道を、博覧会場の方へ歩いて行つたその
である。
会場には大きな正門があり、その中に工業
館、農林館、機械館といふ風ないろ〳〵な建
物があつたが、それがルネッサンス風の洋風建
築で、いかにも立派なやうに見えた。特に正
門から正面に当る小高い丘のよに美術館があ
つて、これだけは二階建で、特別に立派な建
築に見えた。会場全体の設計から言つても多

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

分これが中心になってゐたのであらう。その前の緩い斜面の下に、左右に噴水の多い池があって、その中に据えた塑造の彫刻から水が出るやうになってゐた。そのうち向って左の方は、池の中島の岩に腰かけた揚柳観音像で、あの左の手の観音の右手に持った水瓶から水が流れ出、それが岩の下で遊んでゐる童子の捧げた水盤の上に落ちる。この揚柳観音像が、わたくしには美しく見えた。石膏の彫刻といふものを初(非常に)めて見たせいであるかも

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

知れないが、もう一つの池に作ってあった龍神様の像といふのはまだ見てゐないのであるが、揚柳観音像の方に比べて彫刻としてそれさつぱりしたものがあつたのであらうと思ふ。

美術館の中には随分多数の作品が並んでゐた筈であるが、はつきりと覚えてゐるのは案外に少ない。その中で妙に強くこころにやきついたのは、「こだま」といふ題の油絵である。森の中で半裸の女が、太い樹の幹をうしろにして、両手を耳のうしろに

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

15
64

中央公論 十二月号 八印

寂てゐる口を少し尖いてゐる姿が描いてある。

その表情がいかにもこだまといふものを異常化したがうで解り易かつたといふことである。

でありうがくそれぱかりでなく、外光派として

のこの玲の明るさが心を捕へたのであつたかと知れない。とにかく横長い

果が開けたがうなみたくしは、新しい世

たくしはこの玲の印象を受けた。ところでわ

けが岡田三郎助といふ画家の名を覚えたので

あつたが帰朝後こだまは和田英作氏のアトリエ

（和辻用箋）

中央公論 十一月号 八印

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

のに〳〵といふてこのやうな間違ひをしたかは自分でも解りない。多分この時に岡田三郎助氏の作品も並んでゐたのであらう。それから何い印象を受けたのでもあつたかは中々思ひ出せない。岡田氏は和田氏と共にその前年にパリから帰つて来たので、滞欧中の作品としては〔女肖像〕が有名であるから〳〵事れよりはあの絵が並んでゐたのであつたかと知れない。

なほそのほかに演芸場のやうなそのほかあつ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

(注) エックス大きな

て、丈った西洋の女が何かやるのを見たあう
に思ふが、これは印象が強つてゐないで。同じ
ところで見たものではつきりと覚えてゐるの
はX光線の透視の実験である。実験に立つ
てゐる人の骨骼がぼんやりと見え、またポケッ
トに入れてゐるがまはの中の銀貨や銅貨が黒
く見えた。この時はレントゲンがX線を発見
してからまだやつと八年目だつたのであるか
ら、非常に目新しい驚異だつたのであらう。
がそれよりもつと強い刺戟を与へたのは、

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

夕方から始まる會場の照明であつた。それを
当時はイルミネーションと呼び、博覧会の呼び
物の一つにはいつてゐたのである。と言つてもそ
れは、博覧会の建物の輪郭に添つて電球を並
べて取り附け、點火すると建物の輪郭が光の
線で見えるやうになる、といふだけのもので
あつた。しかもその電球は初期のカーボン線
を使つたので、照明の技術の進んだ今現
在から見ると、まるで原始的な設備であつた
と言つてよい。しかしその当時としては、電

和辻用箋

和辻用箋

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

燈は主として屋内のもので、あって、屋外にこれほど多数の電燈をつけるといふことはなかつた。だから多方面なつてこのイルミネーションが始まると、人々は新奇をでも見るやうな気持になつてぞろぞろとして眺めるのである。

それはわたくしが田舎の村のようであつて、電燈などに慣れなかつたせいばかりではない。その後四年して開催された東京の博覧会でもこのイルミネーションが呼び物であ

中央公論 十一月号 八印
（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

った。漱石は「虞美人草」の初めの方に、作中の主要な人物が揃ってこのイルミネーションを見に行く場面を描いてゐる。今の若い人たちはあの描写を讀んでどんなに大変な設備があつたかと思ふかも知れないが、実はたゞアーボンの電球が博覧会の建物の輪郭として並んでゐたゞけなのである。しかしさういふイルミネーションからして当時の人々は漱石の描いてゐるやうな強い印象を受けたのであつた。それが東京のやうな都会のおとなたちの受け

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

た印象なのである。かう、それよりも四年前の大阪の博覧会で、田舎の村のよが魂を奪なれやうな思ひをしたとしてもいくらも少しもおかしいことはないのである。

考へて見ると、あの頃は都会でも夜は暗かつた。家々の内部の照明は石油ランプが普通であつたし、通りの照明はガス燈がぽつぽつと灯つた位であつた。だから都会でも月の夜と闇の夜との区別はつきりしてゐたし、明るい月が照らしてゐることを町の人が喜んでし

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

ものなどということはまだなかつた。次んや田舎では一月のない晩には提灯がないとなかつた。それから男よと、あの後の半世紀の人工照明の技術の発達は大変なものである。その発達に新紀元を劃したのは エヂソン の白熱電球の発明ださうであります。あの博覧会の頃はその発明後もつと二十年位で、まだ石油ランプを駆逐するほどの力はなく、ガス燈との競争でどつちが勝つかはつきりしないやうな情勢であつたのである。わたくしなどは初め種油

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

の行燈で育ったのであるから、石油ランプで満足してゐた眼に慣れてゐる照明の多い会が、今とはまるで桁違ひだったのだらうと思ふ。それほど照明の技術が進んだために、人間がとれほど幸福になったかといふことは、別に考へて見る価値のある問題であるが、とかく人間が、火とり虫と同じやうに、少しでも明るいことを熱へ

（和辻用箋）

中央公論　十一月号　八印

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

に希望してゐればこそ、照明の技術がこれほどに進んで来たのであらう。これは火の使用が人間の文明の基礎となつてゐることと無関係ではあるまい。

かういふことの結果であらう、わたくしは映画見物によつて都会に憧れる気持をひどく煽られたやうに思ふ。

大阪の映画会は、新しい年が始まつてから間もなく、学校からの見学旅行として、もう一度見に行つた。しかし級友たちと一緒に行を

PRISM BOND
（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

見たかは、まるで覚えがない。宿舎は大阪城
の近くで、練兵場に面したところにあるお寺
であった。二日目には、そこから徒歩で大阪の
町を南へ抜け、住吉神社を経て堺の港へ行っ
た。そこに水族館が出来てゐて、それを見物
したのだったと思ふ。帰りは堺の港から小さ
い(兵)艦船のって、大阪の築港を見物した。
あの防波堤が出来てから間のない頃のことで
ある。防波堤の入口から あまり遠くないとこ
ろに、巡洋艦浪間が碇泊してゐた。案外小さ

(和紙用箋)

中央公論 十一月号 八回

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

いので驚いた覚えがあります。その他に記憶に残ってるのは、級の上で皆がはしゃいで騒いだりすることの出来る自分ではあ

（一行アキ）

級友の群の中に入れば、すぐ一緒にはしゃいだり騒いだりすることの出来る自分ではあ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

RISM BOND

中央公論 十一月号 八印

いたが、しかしそれは書間の七八時間の間だけのことで、その前後に一人になる時間の多かつたわたくしは、深く心を蝕ばまれるやうになつて行だん〳〵深くの憧れの集持に

つた。それは直接には自分の生活の現実に對する底の知れない不満の集持として現はれてくる。その不満はどうすれば満足させられるといふ風に一定の原因に基いたものでは

なく、望ましいものが何つも手の届かない遠くにあると言つたやうな、いはば無限に満さ

中央公論 十一月号 八印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

れない感情のやうなものであつた。それは
「鬼面の如き」いよつて目さめさせられやうな、
いろ〳〵な要求を結びついてゐたと思ふ。わ
たくしは麦が赤くなつて雲雀が高く囀つて多
野の中を、何とも言へない淋しい気持で、と
ぼ〳〵と歩いてゐたことを覚えてゐる。
その五月の下旬に、藤村操の自殺といふ事
件が起つたのである。当時藤村操は数へ年の
十八歳であつたが、わたくしは数へ年の十五
歳になつてゐたから、年齢の違ひは僅か三年

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

であった。この精確にいえば二年七ヶ月に過ぎな
い。と言っても藤村は東京育ちで早熟な俊才
であったし、わたくしよりも六歳年長の魚住
影雄君や安倍能成君たちとは数等に肩を並べ
てゐたのであるから、精神的年齢の相違は三
年どころではなかったと思ふが、しかしそれ
でも同じ年齢の差が二年七ヶ月ではなくなる
ばわたくしが藤村操の自殺から強いショック
を受けたとしても、別に不思議なことはない
であらう。わたくしはこの事件をたゞ新聞の

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

1字下り

報道で知ったのみであったが、その「巌頭之感」という一文は忽ちわたくしの心に烙きついてしまった。

悠々たる哉天壌、遼々たる哉古今、人の小躯をもって此大をはからむとするホレーショの哲学竟に何等のオーソリチーを値するものぞ。万有の real 我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至る。既に厳頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

顔は大なる樂觀に一致すを。

この文章は今の人たちには少し氣取りすぎのやうに感ぜられるかも知れないが、あの當時は樗牛の文章などがもてはやされてゐたのであるから、さういふ時代に十八才の青年が書いた文章としては、かなりあつさりとしたものであつたと言つてよい。この時書いた遺作の哀悼文のなかに、この文章に言及して、哀情哀切、法螺うして意多く人をして泣かずんば止まざらしむ。天下の詩人軟弱の

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

僧情を歌ふこと久しく君に於て壮烈の真文学を得たり」と言ってゐるが、当時さういふ感銘を以てこの文章を読んだ人たちは少くなかつたと思ふ。これを書いた魚住君はその時数へ年二十一歳であつたが、大体それ位の年輩の青年を中心として、上下十年位ゐの年齢の人々の間に、右のやうな感銘を以てこの文章を読み、それを暗誦する人が多かつたのである。

われわれはさういふ年齢のうちでは最も若

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

い響に富いてゐたであらう。ホレーショの挨拶とか、オーソリチーとかといふ言葉は、この時に初めて知つたのであつたやうに思よ。そのせいか、こうでは オーソリチーを價しないと言はれてゐる。その ホレーショの挨拶といふのが、何か深遠な、謎めいたものゝやうに感じられた。さうしてその ホレーショの出てくるハムレットといふ戯曲に對する關心が、強く心に植えつけられた。挨拶といふ字面に對する關心も、ホレーショの挨拶を通じて起

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

つたのであつたやうに思ふ。それほど幼稚で
未つたれたくしに、人生の意義についての反
省を呼び起したのは、この藤村操の文章であ
つた。わたくしはその年の夏休みに、毎晩の
やうに涼み台の上に寝転んで空の星を眺めな
がら、あの文章を思ひ出してゐた。不可解、
煩悶といふ風な言葉が、くり返し〳〵意識の
表面に浮んで来た。春次未萠してゐたあの不
満の気持、現実への底の知れない不満の気持
が、かうして人生の意義についての反省と結

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

びついて行つたのであつた。この時も一二
しかしかういふ気持は何か具体的な理由に
よる苦しみとかといふやうなものではない
のであるから、まことに取りとめのないもの
でもあつた。だからわたくしはさういふ気持
を誰とも語り合つたことはないやうに思よ。
その夏の休暇には、三高の一年を終へた兄も
帰つて来てゐたから、兄ともさういふことを語
り合つた記憶がない。波多野精一先生の西
洋哲学史要をわたくしに呉れたのは兄であ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

つたが、いかしその時機はこの時もう二
年後であつたやうな氣がする。この夏に兄が
わたくしに奨へた印象は、東都での高等学校
生活を見かね非常に樂しんでゐるといふことで
あつた。中学での同級生が四五人位一緒に三
高へ入つたので、あつたし、また三高で新しく
出来た友人もあつて、実際に樂しかつたのだ
らうと思ふ。さう友人の一人の岩村金三郎氏
がこの夏遊びに来られたことをわたくしは嬉
えてゐる。その頃美術評論で名高かつた岩村

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

遠くの明かが従弟だかに当る方で、後に東大
醫学部の平井毓太郎先生の家を嫁かれた。大
変快活な方で、水彩画がうまかった。わたく
しは おまりにもきけすぎに思よ。
見てるたやうに思よ。
かゞ、かうして兄のそたらして来た三高の雰
囲気の中で、最も強い印象を与へたのは、三
高の校友會雑誌にのつてゐたキーツの訃
の報だである。澤者は誰とも変えてゐな
いが、澤は散文澤であつた。キリシア沙浪や

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

キリシアの詩のことを少しは知ってゐ
いと解し難のない作品である。さういふ感
備知識をどの程度に持ってゐたかは、はつき
りとは思ひ出せないが、とにかくめたくしよ、
この散文訳を読んで、小学に強く魅せられ
やうに感じた。特にニンフのポレミアが、海の
姿から美しい女の姿に還つて現つた所で、
夕方、エギナ湾側のケンクリアスの港から
リンスに通ふ山道に立つて、その恋してゐ
る青年リシアスの帰つてくるのを待ち受けて

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

みるあたりの描写や、リシアスの心を捕へた
あとでこの青年と共にコリンスの城門へ入つ
て行くあたりの描写が、何とも言へず魅力的
に感じられた。かうしてゐたくはキリシ
ア的なるものの基礎の上に立つてゐる西洋の
詩の美しさに對して、初めて眼を開かれやう
な思ひをしたのである。

その頃、世界文学を少年に近づけるための
叢書が出版されてゐて、正宗白鳥がホーマー
のイリアッドを、中島孤島がダンテの神曲を、

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

簡単に書き直して出した。ほかにシェークスピア物語も、ラムの本を種本にしたわうなのが出てゐると思ふ。わたくしはそれらをキーツの『ゼア』より先に読んだのか、或は後に読んだのか、それをはつきりと思ひ出すことが出来ない。つまりそれらの本が豫備知識となつて『ゼア』に魅せられたのか、或は『ゼア』に魅せられたことがきつかけとなつてこれらの本を読むやうになつたのか、その区別がつかないのことからつぎつぎと

(和辻用箋)

PRISM BOND

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

人生の意義を思ひ煩ふやうになつてから後の
ことであるのは確かである。
世界文学の現状の業書の中では、中島孤島
の神曲の現状が特に強い印象を與へた。この
作もあの年頃の少年に解り後のないものであ
るかしかしあの作の思想内容を別にして、
たゞ地獄めぐりや浄罪界めぐりの一ヲンダフル
たけを追つて行けば、案外お供にも解り易い
ともいへよう。フランセスカの悲恋についての
思出を聞く場面などもその一つであらう。それ

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論十一月号八頁

を聞いてみたダンテは、哀憐のあまりに、「南無」と言ってパタッと倒れた。これは原待にはない言葉であるが、こうして南無というふ言葉が使ってあり、さうしてそれがよく利いてゐるやうに感じられたことを、といふわけかわたくしは覚えてゐる。

（「行つキ」）

明治三十六年は日露開戦の前年であるから、藤村操の自殺よりも前に既に開戦論とか非戦論とかが盛んであつた。その頃

中央公論十一月号八頁

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

あの事件のあとあたりから議論が白熱して来たやうに思ふ。軍徳教水、堰抗川、内村鑑三などが万朝報に據つて盛んに非戦論を唱へたのは十月に入つてからであるし、東京帝大の法科の教授七人が結束して政府に戦争を不可能とする意見を建言したのも十月のことであつた。しかもこの際に非戦論が反軍思想として弾圧されるなどということは全然なかつた。むしろ政府が好戦論者を厄介視してゐるのではないかといふ風な印象をさ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

へわれ〳〵は受けた〳〵ないからも七博士の建言は
むしろ一般の輿論を代表してゐるやうに
思へるのである〳〵。からいふ気持は、秋になつて
はシア軍が朝鮮へ侵入して来た時は、一層
高まつて行つたやうに思ふ〳〵。十月には非戦論
の急先鋒であつた万朝報が、非戦論の立場を
捨てた〳〵。幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三などの非戦論者は退
社した〳〵。幸徳秋水堺利彦が平民新聞を出し始めたのは
この時である〳〵。（週刊の）

わたくしはどういふ因縁でかこの平民新聞

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

を購読し始めた。翌々三年十月に廃刊されるまで擁けてゐた。社会主義の立場はつきりしてゐたが、しかし論調はさほど過激なものではなかつた。わたくしはこの新聞で普通選挙論やイギリスの労働者の家庭生活の話などを讀んだことを覚えてゐる。筆者はたしか堺枯川であつた。創刊の当時は特に非戦論をふりかざしてゐたわけであるが、しかしわたくしは非戦論に共鳴したためにこの新聞を購読し始めたといふわけではなかつた。そのころについ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

ではわたくしはむしろ戦争不可避論に共鳴し
てゐたやうに思ふ。元もこれは戦争を欲する
とか戦争を好むとかといふ心気持ではなかつた。
ロシアのやうな強国を相手にして戦争すれば、
日本はどうなることだらうと、お伝心れず非
常に心配であつた。しかし日清戦争の後の三
国干渉以来のロシアの侵略的な態度は、お伝
心にも非常な圧迫感を与へた。これはどうし
ても抵抗しなくてはならないとわたくしは感
じた。さういふ敵愾心をわたくしは学校で作

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

文に書いた覚えがある。非戦論に対してなほどといふ気持が起り始めたのは、戦争が始まってから一年近く経った頃であった。

世間の気分に同化して開戦論に引きずられて行ったやうに、書斎学校で彼女の群の中にそれはくわたくしはやはり学校の気分に同化して機械体操に熱中した。書食後全校の生徒が運動場に集まってする時など、機械体操ううまい上級生が鉄棒で大車輪をやって見せるそれを眺めてゐて、自分でもやって見た

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論 十一月号 八印

いやうな気持が旺盛として起つてくる。それには逆立ちがよほどうまく出来なくてはならないのでわたくしは何かに憑かれたやうに逆立ちの練習を始めた。棚の上で逆立ちをして、手ではねて飛び下りたり、手は突いたままで、足で円を描きながら下りたり、さういふことは出来るやうになつたが、倒木の上での逆立ちは怖くて出来なかつた。

さういふ状態の我日々であつたと思ふが、わたくしは学校の帰りに、

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

もと尋常小学で同級であった武田淳心君と連れ立って、大日向原にさしかかった。そこにはもと堤防であったかと思はれる一丈位の高さの土手が、断続のやうになって殖ってゐる。それを見ると、忽ち逆立ちをわって見たくなり、武田君に待って貰って、土手の上のほうへ逆立ちはじめの逆立ちは、手ではねて飛び下りたので、何のことも無かった。二度目の逆立ちの時には、足で半円を描きながら土手の下へおり立つのであるが、足が地につく前の瞬

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

間に、何となく「あつ」と思つた。次の瞬間には右足に激痛を感じて、地に喰ひつくやうに「痛い〳〵」と叫んでゐた。土手の根元のところが少し斜面になつてゐて、足首を突込んだのであらう。折れたのは二本に別れてゐる脛の外側の方一本だけであつたから、その痛みは生れて以来曾て経験したことのない激しいものであつた。その後れもあれほどの痛みを経験したことはないと云ふのであるかも知れない。幸ひ和田君が

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

5152

PASTIMEBOND

一緒だつたので、汽車からかなり遠い町の方まで行つて人力車をつれて来て呉れた。その頃にはもう激痛はおさまつてゐたが、めたくしはそれに乗つて、町の醫者へは行かず、家へ帰つた。家が醫者だつたので、二人ともそれを当然のことのやうに考へたのである。

家へ帰ると手当はお父かあさんがしてくれた。ギプスの材料がないので、薄鉄板のやうな板を当てゝ繃帯した。その為か、右の足首は少し外側へ曲つて附いたが、その他には別に故障

中央公論 十一月号 八印刷

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十一月号　八印

(和辻用箋)

なく、五十日位でひっこを引きなから学校へ行けるやうになつた。この時は特別の場合として汽車通学を許して貰つたのである。

この骨折のお蔭でわたくしは鐵棒の大車輪を断念したばかりでなく、二ケ月近く寝てゐる間に、詩や小説に漫みかけた癖がついたやうに思ふ。そのくせ、寝てゐる間に何を讀んだかといふことは、殆んど覚えてゐない。ちやうどその時に、前田林外、岩野泡鳴、相馬御風などの連中が「明星」から別れて「白百

53

中央公論 十一月号 八印

会 という新しい雑誌を始めたが、その創刊号がいかにも新鮮な感じを与えてくるのでいろいろ雑誌を取寄してみたのであったかも知れない。その頃よりもむしろ誌の方が魅力を持ってみたやうに思ふ。

（つづく）

お詫び

前月号「自叙伝の試み」中ニ八三頁下段ぐ蘆田慶え助先生とあるのは蘆田恵之助先生の誤りでした。謹んで訂正いたします。

（和辻用箋）

中央公論 十一月号 八印

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

中央公論　十二月号　七印

中學生（四）

自敘傳の試み（二十三）

和辻哲郎

足の骨を折つて寢てゐたのは明治三十六年の十二月から三十七年の一月へかけての二ヶ月ほどであつたが、その間にわたくしは、急に自分が變つて來たのを感じたやうな記憶がある。問となくその三月の初めに滿十五歳になつたのであるから、一年足のせいであつたか

（和辻用箋）

正字旧仮名づかい原文のまま

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

も知れないし、或はまた負傷の恢復期の特有の現象であつたかも知れないが、とにかくこの時期から、文墨や思想に對する興味が、かなり激しく湧き上つて来たやうに思ふ。それには、かねてから願つてゐた三ヶ月の間、漢文の講義を聴くことも、手傳つてゐるかも知れない。

學校から許すを得たと云つて父が洋車の通學乗車券を買つて来て呉れたのは二月の初めであつた。これは恐らく父が學校のことに関

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

してわたくしの面倒を見てくれた唯一の場合であったであろう。それが珍らしかったせいか、わたくしはその時の父の顔つきなども忘れ浸べることが出来る。しかしそのために父が学校まで交渉に行って呉れたのではなかったやうに思よ。多分父は、わたくしが学校で教室を教はってゐた萩原栄吉先生に、さういふ交渉を頼んだのであらう。萩原先生の家は日向ひの里園といふ村にあって、そこから学校へ通ったり、或は姫路に下宿したり、いろ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64
ガラス使用

いろにしてゐられたが、その頃は家から通つてゐられた。わたくしの家のそばを通つて停車場へ行くのである。また重圍といふ村も父が診えず往診に行つてゐる村であつた。だから父が萩原先生と連絡を取ることは容易であつた。わたくしはそれを確かめたわけではないが、多分萩原先生にいろ〳〵と耳打つて貰つたのであらう。

その頃のことではつきりと思ひ出すことの

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

出来ないのは、どのことを引きながら通学を始めてから数日の後、二月十一日の紀元節の朝の光景である。わたくしは停車場で萩原先生と落ち合い、先生から日露開戦のことを聞いた。

開戦の詔勅と仁川ではロシアの軍艦を沈めたことが一緒に報道されたのであったために思ふ。当時は強大なロシア帝国との開戦を怖れる気持が多くの人々の心に去来して居たのであるが、そのロシアの軍艦がわりに手軽にお

ち沈められたといふ報道は、なの気持を緩和

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

するのに非常に役立つた。日頃あまり興奮さ
れない萩原先生が、頻りにさういふことを注
された時の表情を、われながらおかしくもあ
ら思ひ出すことが出来る。

この萩原先生には一年の時から五年の終り
まで、おつと数学を教はつた。非常にはつき
りしてゐて理解し易く、数学で困つたことは
一、二もなかつた。特に幾何学がはつきりして
ゐて、頭に入り易かつたやうに思ふ。先生の
方でも非常にひいきにしてゐられたらしく、

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

友だちがさういふ意味の先生の言葉を伝えてくれたことがある。ところが、右の骨折の年の春だかと思ふが、代数だけほかの先生が受持つたことがある。軍隊から生て来た、中尉だかであつた方。わたくしはその先生ばかりの、背の高い、カイゼル髭を生やした方ほかは、名前を忘れてしまつた。萩原先生の場合と同じやうによく解つたつもの説明が解りにくいと思つたためではなく、りであつたが、といふわけか、試験になると間違ひをやつた方。でその次には、萩原先生に

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

9 10
8 9

教はつてゐた時よりも一層多く時間をかけて
復習などをやつたが、やはり試験になると同
じやうに間違ひが出た。どういふわけなのか、
自分にも見当がつかなかつた。ひいきされ
る先生のものはいつも満点で、さうでない先
生のものはいつも間違ひをやるといふことは、
いかにも見つともないと自分でも思つたが、
しかしどうにもならなかつた。卑しくてこの
先生は、戦争のためであつたか、間もなく
なくなり、代数はそつくり萩原先生の受持に

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

帰った。すると試験の時に面倒ひをするということもなくなった。結局は萩原先生の教へ方がうまかったのかと思よ。その後に高等学校の入学試験を受けた時には、英語は面倒へたが、数学は面倒へなかった。だから楽々と通ることが出来た。

その後、一高の一年を終へて夏休みに帰省した時、数藤斧三郎先生の「無理数の概念」といふ講義のことを萩原先生に話した。すると先生は非常に興味を持って、そのノートを

中央公論 十二月号 七印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

見せろと言って持ち帰らされた。よほど安岡の好きな人という印象を受けた。次の学年は数藤先生からヒューリッド教育学の講義を聴いたのであるが、これは難しくて十分消化が出来なかった。だから萩原先生にも報告が出来なかったやうに思ふ。

がこれらは五十年前のことである。先生は長命で今なほ健在であるが、晩年には多多益多道元禅師に傾倒され、信仰の上でも、思想の理解の上でも、洵に深いもの

（和辻用箋）

（味は銀箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

を掴んでおられるらしい。さういふ類の話を、戦後久しぶりにお目にかかって、八十何歳かの先生のロから聞いた時は、しめし落ちついて考へ兆常な驚きを感じた。しかし落ちついて考へて見れば、それは少しも不思議なことではなかった。先生の村にあるお寺は、たしか円通寺と言ったと思ふが、曹洞宗のお寺で、先生の家はその寺の檀家であった。だから先生が年とってから祖師の道元禅師にだん〳〵深い関心を持つやうになられたことは、いかにも自

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

色のなり行きだつたのである。

わたくしはこの寺の姿を子供の頃から見慣れてゐた。寺はわたくしの村からは東北の方へ十四五町も離れてゐたであらうか、川向ふにひろがる水田地よりもいくらか高くなつた段丘の上に、白壁の塀が見え、その内や外にかなり高い松の古木が並び立つてゐた。それが禅寺であるといふことをわたくしに教へてくれたのは父であつた。父は宗教のことには

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

むしろ冷淡で、頑文の熱心な真宗の信仰に對
くても、仰ら共鳴するやうなことは寺のはなか
つたが、しかしこの禅寺の住持のことだけは、
時々尊敬の涙で無味を以て話してゐた。今
日は寺へ參って話しこんで来たといって、何
か住持の話を伺へてくれたことも幾つたやう
に思ふ。しかしその寺が禅宗のうちでも曹洞
宗に屬するものであり、さうしてその曹洞宗
を日本で興したのが道元禅師であるとい ふや
うなことは、その當時は殆んどなかつたの或

中央公論　十二月号　七印

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

は、教はいたかも知れないが、それは入らなかった。わたくしにとってさういふ名が重要な意義を帯びるやうになったのは、その時よりも十五六年も後、しかも極めて偶然の機会によってである。しかし萩原先生はその時檀家に生れた人であった。わたくしが教学を教はった時、先生が道元禅師とか曹洞宗とかのことを一言も話されなかったそしてそれはさういふ名が頭になかったからではなくてもよまいの先生にとっては、偶然の機会など

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

を待つまでもなく、道元禅師との縁は結ばれ
てゐるのである。それが、年と共に進々と成熟
して来て、深い関心の對象となって行つたの
であらう。それに比べるとわたくしなどは、
偶々の機会に門外から瞥見て大程るに過ぎな
い。先生のはから道元禅師の名を聞いて初め
驚きを感じたなどといふことは、少し滑稽の
沙汰であったかも知れない。
数学の先生のことを書いてゐると、ほかの

（一行アキ）

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

先生たちのことをいろ〳〵と思ひ出されてくる。英語は勝豊茂先生と深沢由次郎先生とに教はつたが、勝先生は後に永く姫路中学の校長をつとめた人、深沢先生は後に古参の教授を経て早稲田大学の教授になつた人である。この二人のうち勝先生からは英語の初歩や和文英訳などを教はつた。体の小柄な、極めて穏やかな人物であつた勝先生は、非常に熱心に英語の発音を教へようとして、「発音を教へるのぢやない、エ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64
ガラス使用

ちがない、「R」という風なことをくり返し（
言はれた聲が、今でも耳に殘るやうな氣が
かする。しかし教室以外でさういふ發音を耳
にする機會のなかつた田舎では、さういふ發
音を覺えることの重要さが一向身に沁みて感
じられず、自然熱心が足りなかつたと見えて、
それを身につけることがたうとう出來なかつ
た。その上は東京などで幼時から外人と接觸
しつゝ耳で外國語を覺えた人とは、まるで違
ふやうに思ふ。

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

深沢先生はいつも和服のしゃれたなりをしてゐて、教壇では大抵椅子に腰掛けたまゝで、チョークなどは殆んど使はなかった。その代り読本の内容に関聯していろ〳〵と面白い話をされた。丁度かうに東京案内を使ひ、こゝはかやばちやう、あれが皇居のお濠端の松の木、自動車の通るところは重要な場所だから、などと説明されるやうなことであった。わたくしはこの先生から英語の小説を借りて読んだが、何をきっかけとしてさういふことが始まったかは今でも覚えがない。多分わたくしの方でさういふ読み

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

物のことを聞きに行ったのであろう。最初に借りて読んだのはアメリカの探偵小説であった。これがわたくしの英語で読んだ最初の本であったが、題も作者の名も全く覚えてない。覚えてるのは、ピストルという言葉を使わないでリボルバーと書いてあるのが目新しかったこと、主人公の探偵がいよ〳〵犯人を追いつめてリボルバーを突きつけ、Hands up!（だった と思う）と言ったこと（位のもの）である。その時はまだ追剝ぎ

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

を意味する ホールドアップ という名詞のある ことは知らなかったが とにかく一気に読み 終へることが出来たので、それに勇気を得て、 次に読めさうな本を借りて見ひに行った時に、 先生の貸し呉れたのが、ミッドロジアン であった。これは非常 に面白くて、最後までハラ〳〵しながら読み 通したやうに思よ。多分三十七年の夏休みの ことでせう。

わたくしはそのほかに深沢先生からといふ（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

222

ふ本をかりたが、また英国の文藝に関してで
ういふことを教はつたが、まで覚えてゐな
いが、しかしその頃櫻井鴎村の論輯で津田英
塾から出てゐた英法雑誌を講読したり、早
稲田大学の当局部から刊行された英文学史の
本を買つて読んだりしたのは、多分漱石先生
に教はつてのことであつたかも知れない。櫻
井鴎村の雑誌の論輯者では英書の再次販売を
やつて地方の読者の便宜を計つてゐた。英書
と言つてもその頃日本へ盛んに入つてゐたル

(和辻用箋)

(神辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

トトレツ矢の詩人叢書とか、マクミランのアルビヨン叢書とか、クロー定価のアスター叢書とかいふ風の廉價版であつて、われ〳〵が手を出すことの出來る程度のものであつた。

ほかに洋書を買ふ便宜のないわれ〳〵にとつては、この取次販賣がどんなに嬉しかつたか知れない。しかしさういふ仕方でバイロンとかキーツとかシエリとかの詩集を手に入れたについては、さういふ選擇を導いてゐたその人の趣味が、しかしわたくしは深沢

(和辻用箋)

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

先生から直接にさういふ詩人や詩集のことを
聞いた覚えは全然ないし、さういふ知識はどう
も坪内さんの英文学史から得たやうに思ふ。
それは薄版で、薄い茶色の布の表紙のついた、
かなり部厚な本であった。著者名は消逸の
字を使はず、坪内雄蔵著としてあったやうな
気がする。わたくしはこの書を非常に興味深
く読んだので、その後消逸人と逍遙の違ひ
な著作に比べて、この書が最も優れたものだ
といふ印象を強くしてゐる。」を時他にこの種の

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

著述がなかったのだ、その意味で重んじられたということはそうであろうが、また実際に逍遥の若い頃の学問的情熱がこの中に流れ吹き込んでおったとはいえよう。少くともそれなくして自身はこの書から非常に強い感銘を受けた。ホレーショの歩学というものを知って以来の関心の対象であったハムレットの作者シェークスピアについて、初めておぼその事を知り得たというばかりでないのはたしかにタイサーサーのカンタベリー物語とか、バン

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64

ガラス使用

ヤンの天路歴程とか、ニルトンの失楽園とか、
いろ〳〵なものが眼界に入つて来て、強く関
心を刺戟するやうになつて来た。さすがに十
八世紀のものになると、さほど興味を起させ
ないながつたが、十九世紀のはマンシズム
はまた強く興味をいだいた。ワーズワスやコー
ルリジ、バイロンやシェリーやキーツ、さういふ詩人たちがめたくしの眼に非常に大きい存
在として映るやうになつて来た。キーツの可し
ミアの謬沢を読んで強く魅せられたことは

（和辻用箋）

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

前に書いたが、バイロンをひどく好きになったのは、彼の作品の魅力によってではなく、因襲に反抗する。この詩人の奔放な生涯、特にギリシアの独立を助けに行ったこの詩人の最後の行動などを、同情の筆致を以て描いてある坪内さんの英文学史の叙述に基いてるためではないかと思う。その後ルートレッジ版の詩人叢書の中のバイロン詩集を手に入れた時、その巻頭に載ってるバイロンの肖像、横目を使ってるので眼の白味がたっぷりを出てるあの肖像を

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』 請求記号 WB12-64

ガラス使用

見て、一寸気に入ったというふうなことも
ゞ。とにかくのチイルドハロルドの遍歴と
かのドンのジュアンとかというふ代表作は、中々
難かしくて、到底(迚)(迚)が立たなかったにかゝは
いず、何となく引きつけられて、味も解らず
にかぢりついてゐた。その頃木村(鷹)太郎氏が
バイロンの飜訳を出し(始め)たので、自分のやり分
がなくなりはしないかと心配した覚えがある。
さうして実際、三十七年の暮か三十八年の初
め頃に、(ゾラ)のシーヨンの囚人(を)というバイロン

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

の海を渡って中学の校友会雑誌のせる
に至った。シーヨンというのはジュネーヴ湖の
東の端にある岩の上の城の名で、そこに六年
間囚はれてゐたのは、ジュネーヴの自由を望ん
うとしてサヴォイ公に捕縛されたフランソワ・
ドゥ・ボニヴァールである。わたくしは別にボニ
ヴァールのジュネーヴ年代記とか宗教改革にお
ける役割とかに興味を持つわけではなく、この詩がわりに解り易かったことと、さ
ほど長くなかったことに基いてこの詩を選

（和辻用箋）

中央公論 十二月号 七四

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用

中央公論 十二月号 七印

んだのであつた。しかもバイロンの詩を日本
語に移すには七七調かいろはにほへとちり
である。
しかし何と言つても解らない詩よりは解る
詩の方がよいに相違ないので、詩人としては
さほど好きでないと思ひながらも、ゆくゆく
はテニソンの詩を読む方が多かつたやうに思
ふ。特にアーサー王の円卓騎士の物語を敎つ
た詩などは非常に愛読した。この中世の物語
に引きつけられたことも有るが、何よ

(和辻用箋)

中央公論 十二月号 七印

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

りも遠くて解り易かつたといふことが第一の理由であらう。それはロミオとジュリエットの姫とかいふやうな短い詩のみならず、同じ王の牧歌とかいてもさうであつた。まとめられた長篇においてもさうであつた。ほかにもイレナクのアーデンのやうに新しい材料を取つた長篇の詩も、解り易いせいで非常に面白かつた。のみならず、テニソンの短い歌の美しさなども、かなり強くわたくしの心を捕へたやうに思ふ。例へば王女の第三章の初めに出てくる sweet and low に始ま

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

あの子供など、わたくしは殺さないで
諦めたか知れない。
テニソンは英文学史の手引きで読み始めた
と思うが、ロセッティなどラファエル前派の詩人
たちに関心を持ち始めたのは、上田敏氏などの
雑誌に書かれたものに刺激されたのではなか
つたかと思う。前からすでに持ってゐた外ンテ
への関心と、薄田泣菫や蒲原有明などの長詩
に對する愛好の気持とが、こゝには結びつい
てゐるかも知れない。特に有明はロセッティに

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

心酔してゐた詩人であるから、さういふ方からの郵便もあつたであらう。

さういふわけでもなくしては明治三十七、八年の秋の頃には殆りにバイロンとかテニソンとかはゴッテイとかに讀みふけつてゐたのですが、ちやうどそれが日露戦争の最中であつたことを思はせる記憶も、少しは殘つてゐる。

その頃われわれの文庫の明星の向百合の新聲などといふ雑誌のほかに、帝國文學

中央公論 十二月号 七印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

をも購読してみたのであるが、その「帝國文学」も、「日露開戦に刺戟されて、帝大の教授たちの戦争に関する詩や文章をのせたことがある。夏休まりと前、五月頃だったと思よ。そのうちに夏目漱石の「従軍行」がまだ載ってまた。「赤に雛あり、艦艇ゆるす、雛はゆるすな、男兒の意氣」という調よの、六行づゝ七節の長詩である。泣菫や有明の詩に魅力を感じてみた当時のわたくしにとっては、この詩は非常に物足りないものであった。が、ほかの教授

中央公論十七巻号 七印

(和辻用箋)

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64

ガラス使用

3536
14

たちの書いたものを何も覚えてゐないで、この詩のことだけを覚えてゐる理由が、どうもわたくしにははっきりと映って来ないのである。夏目漱石の存在が、わたくしの眼にはっきりと映って来ないのは、この時より半年の後、翌三十八年の四月の帝国文学で「倫敦塔」を読んだ時ないふ風にわたくしは覚えてゐなかったのであった。

しかし（軍）の従行（軍）のことを忠よと、わたくしは既に前から或期待を以て漱石を眺めてゐたことになる。多分わたくしは、新婦朝者夏

国立国会図書館　タイトル『自叙伝の試み』　請求記号 WB12-64
ガラス使用